天使は地球で遊びたい
～地球に来たけど帰れなくなった～

ぽん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

娯楽も何も無い天界での生活に退屈していたノアは地球に行くことを決意する。
しかし、地球について〝娯楽が沢山ある〟以外何も知らず……

目　次

1話　天界なんてもう飽きた ―― 1
2話　着いて秒で逃亡生活開始 ―― 8
3話　これからどうなるの？ ―― 13
4話　理解が追いつかない ―― 19

1話　天界なんてもう飽きた

「ねぇルナ、私決めた！」
　私は椅子から立ち上がり、メイドのルナに言う。
「今日で天界を出て行くことにするわ！」
「分かりました。では、荷物をまとめておきますね」
　少し間を開けて、ルナは応えた。歳が同じで、小さい時から一緒にいたからか、ルナとの関係は主人とメイドという関係よりかは、双子の姉と妹という関係に近い。メイドにしては少し砕けた口調なのは、そういった理由があるからだ。
「あれ？　もしかして、あんまり驚いてない？」
　私は溜息をつきながら、椅子に座り直す。もっと驚くと思っていたのに、ルナは顔色一つ変えず、私の前に置いてあるティーカップに紅茶を注いでいる。
「そうですね。普段からこんな世界退屈だ！　早くどこか遠い世界に行きたい！　と言っておられていましたので、そろそろかなと」
「えっ、私ってそんな頻繁に言ってたの？」
「1日の間に少なくとも24回程度は言っておられましたよ」

「1時間に1回ペース!?　無意識って怖い……」
　心の声が漏れてしまっていたらしい。それも1時間に1回のペースで。
「あれって無意識だったんですか?　王族たちとの食事の席でも「ジジイ共はよくこんな娯楽も何もない世界で退屈せずにいられるわ」などと言っておられたので、私はてっきり天界へのあてつけか何かだと思っていました……」
「えっ、何そのエピソード!?　王族に向かってジジイ共って、無意識の私強すぎない?　反逆罪に問われてもおかしくないレベルの発言だよね?」
「ちなみにですが、ババア共とも言っておられましたよ」
「無意識の私がさらに罪を重ねていく……」
「でも大丈夫ですよ、ノア様。あの時の料理のセッティングは私が担当でしたので」
　そう言ってルナは私の前に座り、紅茶を啜る。どうやら、私に入れてくれたのではなかったようだ。図々しいにも程があるが、こんなの日常茶飯事なので、気にする程のことでもない。
「それくらい私も知ってるよ。それと私の罪が無関係ってことも」
「いえいえ、無関係なんてことはありませんよ。ノア様は関わることがまずないので、料理のセッティングについて詳しく知らないと思いますが、セッティング中というのは1人になる機会も多いんです。なので、王族たちの料理に睡眠薬や毒なんかを盛ることも

簡単にできるんですよ」
　ルナは肩の下辺りから生えている真っ白な翼を大きく広げ、天使が絶対にしないような、小悪魔のような笑みを浮かべる。セミロングの髪と同じ色をしている薄水色の瞳が濁ったように見えるのは、多分そのせいだろう。
「てことはまさか、王族たちの料理に毒を盛ったってこと？」
「いえ、そんなことはしていませんが、お酒には少し細工をしました」
　さっきまで浮かべていた笑みが嘘かのように、普段の表情に戻った。笑ってしまいそうになるから急にスンとしないで欲しい。
「細工って毒でも混ぜたの？」
「いえ、あの食事の席で準備されていたお酒を、全てアルコール度数の高いお酒に変えただけです。なので、誰の記憶も残っていないと思いますよ」
　毒を盛っていなかったことに胸を撫で下ろしながらも、私は違和感を覚える。
「私の勘違いかもしれないけど、ひとつ聞いてもいい？　もしかして、私が飲んでたお酒もそのお酒だったり――」
「しますよ」
　ルナは食い気味に応える。
「そんなお酒飲ませたから、私が無意識のうちにそんな発言をしちゃったんじゃないの

？」
「いえいえ、ノア様は食事が始まる前から言っておられたので、関係ないと思いますよ」
「始まってすらなかったとは……」
　てことはもう私、確信犯じゃん。
「全員揃って数分後くらいにはもう言っておられましたよ」
「私、よくその場で捕まらなかったな……」
「ジジイ共は耳が遠いので、多分聞こえていなかったのでしょう」
「ルナもジジイ共って言っちゃうんだ」
「どうせ誰も聞いてませんので、心配ありません。もし聞かれたとしても、ノア様の命令と言うことにして、私は天界から逃げるのでご心配なく」
「勝手に私を身代わりにしないでくれる？」
　主人を身代わりにして逃げるメイドって初めて聞いたんだけど。普通は逆じゃない？
「普通はそうかもしれませんが、私は普通ではないので」
「そこは自覚してたんだ……」
「もしかして、ノア様は無自覚天然キャラの方が好みだったのでしょうか？」
「急に何の話!?　話の方向性が変わりすぎてるから、1回戻そ？　ね？」

こういう雑談もたまにはいいと思うけど、私はこんな話をするために、ルナに話しかけたわけではない。
「分かりました。でしたら、私は荷物をまとめてきますので、ノア様は少々お待ちください」
「えっと……そのことなんだけど、もう荷物はまとめてあるんだ。ルナの仕事取っちゃってごめんね」
私は罪悪感を覚えながら、クローゼットに仕舞っておいた、荷物をまとめたリュックを取り出す。こういう時だけは『収納魔法』が使えたら良かったのにって思う。
「いえ、大丈夫ですよ」
ルナはところで、と更に続ける。
「行き先はどこにしたのでしょうか？」
「行き先？　そりゃあもちろん地球だよ！」
「地球というと？」
「この前『透視魔法』で遊んでた時に見つけた星のことだよ」
『透視魔法』は私の固有魔法の１つで、魔力を消費して普通では見えないくらい離れた場所や別次元の世界なんかを見ることができる魔法だ。退屈しのぎにはかなり便利な魔法だけど、魔力の消費量が多く、１日に数分程度しか使えないのがネックだ。

「どうしてそんな偶然見つけただけの星に行こうと？」
「それはもちろん娯楽が沢山あるからだよ！」
　見たことない乗り物に、見たことないアーティファクト。退屈とは無縁の星と言っても過言ではは。
　天界なんかと地球を比べたら、文字通り〝天〟と〝地〟の差があると思う。この場合は天の方が下で、地の方が上になるけど。
「そうですか、分かりました。それではノア様、お気をつけて行ってらっしゃいませ」
「ん？　待って待って、なんかルナ勘違いしてない？」
「勘違い？」
「私一人で行くんじゃなくて、ルナも行くんだよ？　そもそも私、『次元魔法』使えないし」
　地球は天界とは違う別次元にある世界の星だから、ルナの固有魔法の1つである『次元魔法』でしか行くことができない。同じ次元だったら、私の『転移魔法』で行けたのに。
「そうですよね。知ってました知ってました……」
　コホン、と咳払いをするルナ。
「それではノア様、準備を始めますね」

言って、ルナは魔法陣を構築し始める。魔法陣は魔力の消費量に比例して複雑になっていくため、『次元魔法』を使うための魔法陣にら精密で正確な魔力操作が求められる。

例えるなら、シャンパンタワーをお盆に乗せて、そのお盆を子指一本で運ぶような感じ。それを平然とやってのけているルナは、メイドなんかで収まっていいような器じゃないと思う。

「魔法陣の準備完了しました。心の準備はよろしいでしょうか？」

話しているうちに、巨大な魔法陣が完成していたようで、あとは私が合図を出すだけだ。

「もちろん！」

「それでは行きますよ。『次元魔法』」

魔法陣から溢れ出た光に全身が包まれたと思ったら、次の瞬間には視界が切り替わっていた。

２話　着いて秒で逃亡生活開始

　切り替わった視界の先には小さな池が広がっており、その中にある金色に輝く建物の２階のバルコニーのような所に私たちはいた。池の周りにはアーティファクトをこちらに向けている人がいることから、この世界が地球だということが分かる。上を見ると雲一つない青空が広がっており、下を見ると燃え盛る炎と煙が広がっていた。
「この建物の１階部分が燃えているようですね」
　ルナは他人事のように呟く。
「それくらい見たら分かるよ！　そんなことより、これって私たちが犯人って思われたりしないよね？」
「私とノア様がこの世界に来たタイミングとほとんど同じ時に火災が発生したので、犯人と思われる可能性が高いかと」
　やっぱりそうなるよね、と私は大きな溜息をつく。
「地球に来て早々、逃亡生活とか私嫌だよ？」
「でしたら、諦めて冤罪で捕まってみるというのはどうでしょう？」
「それはもっと嫌だ」

そんな話をしているうちに、炎は2階にまで広がって来ていた。道理でさっきより熱いわけだ。
「とりあえず、ここから離れようとは思うんだけど、消火くらいはしておいた方がいいよね」
私たちのせいじゃないけど、放置しておくのもなんとなく寝覚めが悪い。
「でしたら、消火の方は私に任せてください」
「それじゃあ私は転移の準備だけしておくね」
私は『転移魔法』を使うための魔法陣を構築しながら、池の水をまるで意志を持った生き物かのように操り、燃え広がる炎を消していくルナを眺める。確かに水は他の物質より魔力を通しやすいけど、ここまで上手く操るとなるとかなりの技術が必要になってくる。
「これだけの水があれば、固有魔法を使うまでもありませんね」
「それはルナの魔力操作が異常だからだよ!」
「私からすれば余所見をしながら、魔法陣を構築しているノア様の方が異常だと思いますよ」
「そう？　でも『転移魔法』の魔法陣って簡単だよ？」
「そうですね」

池の水を元に戻しながら、ルナは呆れたように言う。
さっきまで燃え盛っていたはずの炎は、いつの間にか見えなくなっていた。
「ノア様、転移の準備はまだでしょうか？」
「もうとっくにできてるよ！　ルナこそ、準備できてるの？」
「私はいつでも大丈夫ですよ」
「それじゃあ、移動するとしますか。『転移魔法』」
『次元魔法』を使った時と同じように、魔法陣から溢れ出た光に全身が包まれたかと思ったら、次の瞬間には視界が切り替わっていた。『次元魔法』も『転移魔法』も場所を移動するという点では同じなので、仕方ないことだ。
「ノア様、ここはどこの森林でしょうか？」
ルナはキョロキョロと物珍しそうに辺りを見回している。
「私に聞かれても……」
「転移先を指定したのはノア様ではないのですか？」
「確かに私が指定したけど、人目に付かない場所としか指定してないから、どこって言われても分からないよ？　分かるとすれば、さっきまでいた場所から２０キロ前後離れているどこかの山の中ってことくらいかな」
その理由は『転移魔法』には魔法陣を中心とした半径１００キロ以内にしか転移でき

ないという制限があり、消費魔力は転移距離に比例するので、大体の距離は分かる。
「そうですか。ところでノア様、これからの当てはあるのでしょうか？　まさか、準備も何もしていないのに、天界を出て行くと、言っておられたわけではないですよね？」
「当て？　当てなんてあるわけないじゃん。私、地球に来るのこれが初めてなんだよ？」
どうしてルナは、そんな分かりきったことを聞いてくるのか、私にはよく分からない。
「ノア様に計画性というものを期待していた自分が愚かだったということが今回でよく分かりました」
まるで世界の理でも悟ったかのような表情を浮かべるルナ。
その顔を見て、私も自分が何かやらかしたのだということを悟った。
「ということはどうせ、この世界の言語や常識といった知識も皆無ですよね？」
「はい、ルナさんの仰る通りで……」
私は地面に正座して、メイドであるルナにへりくだる。
「それではお聞きしますよ、ノア様。知識も当ても何もない状況で、どのように生活していく予定だったのですか？」
「魔法とかで、何とかできるかな、って……」
私は言葉を詰まらせる。
「本当にそう思っているのですね？」

「思ってない、です……」
　そうは言ったが、今のは半ば強制的だったと思う。けど、思ってもそんなこと口にはしない。
「でしたら、ノア様。一度天界に戻りますよ。拷も、いえ。説教はそれからです」
「ちょっと待って待って！　今、拷問って言おうとしたよね？」
「いえいえ、きっと空耳ですよ。私が心の底から敬愛するノア様にそんなこと言うわけないじゃないですか」
「だとしたら、ルナの心の底は靴底くらいの深さしかないと思うよ……」
　ルナはきっと深さ１５ミリ程度の心の持ち主なんだろう。
「って、そんなことはどうでもいいんだけど、もしかしてルナ、気づいてないの？」
「気づいてないとは何のことでしょう？」
　ルナは首を傾げる。
「この世界、魔力が無いみたいだから、『次元魔法』使えないと思うよ？」

3話　これからどうなるの？

私がこの世界に魔力が無いことに気づいたのはついさっきのことだった。魔法というのは本来、場にある魔力を優先的に使い、足りない分を自身の保有する魔力で補って発動するんだけど、さっき使った『転移魔法』は場にある魔力を一切使用していなかった。

偶然この場所だけ魔力が無かったという可能性もないとは言い切れないけど、基本的に魔力は世界のどの場所でも均一に保たれるようになっているから、その可能性はかなり低い。

「分かった？　ルナ」

ルナは私を無視し、慣れた手つきで魔法陣を構築していく。

「『次元魔法』」

魔法陣から光が溢れ出し――そして、魔法陣は霧散した。魔力不足だ。

「だから、何回やっても一緒だって」

「でも、ノア様は『転移魔法』使えてましたよね？　だったら、私にだってできるはずです」

「何がだったらなのかはよく分からないけど、私が『転移魔法』を使えたのは単純に『転移魔法』の魔力消費量が少ないからだよ」
『転移魔法』と『次元魔法』では消費魔力が倍以上違ってくる。
　ルナの魔力が最大まであれば、1回は使えるけど、この世界に来る時に1回使ってるから、ルナの魔力は半分程度しか残っていない。
「ということは、本当に戻れないのですね」
「だから、そうだって最初から言ってるじゃん!」
「天界に戻って拷問されるのが嫌で、嘘をついているのだと思っていました」
　ルナは私をなんだと思ってるんだ?
「そんな嘘つかないよ!　ていうかやっぱり拷問はされるんだ……」
「いえいえ、空耳ですよ」
「ルナ、空耳って言ったら何言ってもいいと思ってない?」
　私はルナの目をじっと見つめるが、ルナは直ぐに目を逸らした。
「そんなことより、ノア様。これからどうするか考えましょう」
　ルナは平静を装いながら言う。
「もう少し上手い話の逸らし方できないの?」
「なんのことでしょう?」

口調は落ち着いているけど、未だに私と目を合わせようとしないので、とぼけていることがバレバレだ。

「まあ別いいよ、それで」

だけど、私は海のような広い心を持っているので、話を逸らされてあげることにした。

それから、数時間程話し合った結果、まずは翼を消そうということになった。理由は単純で目立つからだ。あの趣味の悪そうな金色の建物に火を付けたという冤罪をかけられている可能性があるから、極力目立つのは避けたい。

この世界には翼が生えている人は私が『透視魔法』で見た限り1人もいなかった。翼を付けている人はたまにいたけど、周りから白い目で見られている人がほとんどで、白い目で見られていない人でも目立っていたのは確かだ。

それに、この世界だと翼の使い道が全くない。天界だと場にある魔力を吸収して、魔力を回復できるけど、この世界には吸収できる魔力が無いので出している意味が無い。他にも魔力を使って飛んだりもできるけど、貴重な魔力を無駄にはできないので、それも無しだ。

次に服装。私は白を基調とした露出度の低いドレスのような服で、ルナはロングスカートのメイド服だ。天界だと普通だけど、この世界だと翼と同じように目立ってしまう。

けどその問題は、私が寝る時に着る用に持ってきていた服に着替えるというので何とかなった。天界での寝る時用の服とこの世界の服装が似ていたのが不幸中の幸いだ。

そして、髪の色。ルナの薄水色の髪も、私の白色の髪もどうしたって目立つ。目立つけど、こればっかりはどうしようもない。全部切り落としたらいいかもしれないけど、それはそれで目立つと思うし、髪が無いのは格好悪いので絶対に嫌。フード付きの服とか、髪まで隠せるローブとかがあれば、それが一番良かったのだろうけど、もちろんそんな物は持っていない。

最後に言語。これが一番の問題だ――私はそう思っていたのだけど、どうやらルナは違うらしい。

「この世界の言語は任せてください。一日で私が何とかしてみせます」

自信ありげな表情でルナがそう言ってきたので、私はルナに任せることにした。というか、私にはどうすることもできないので、ルナに任せるしか選択肢がない。

「ということでノア様。私を『転移魔法』で人が多い場所に送ってください。できれば、人目に付かない場所でお願いします」

「人目に付かない、人が多い場所って矛盾してない?」

「一見矛盾しているようにも思えますが、大都市の建物と建物の間とかでしたら、その条件に当てはまると思いますよ」

ルナがそう言うので、試しにその条件で場所を指定してみたら、かなりの場所が見つかった。
「結構あるけど、どうする？」
「でしたら、先程いた趣味の悪そうな金色の建物から近すぎず、遠すぎない距離でお願いします。その方が情報収集が捗ると思うので」
「分かったけど、私は行かなくていいの？　私がいなかったら、帰りは転移できないよ？　ていうかこの場所分かるの？」
『転移魔法』は他人だけを転移させるということはできるけど、それは魔法陣の範囲にいる人限定で、遠くにいる人を自分のところに呼び出したりとかはできない。それができるなら、もうそれは『転移魔法』ではなく、『召喚魔法』だ。
「ノア様は来なくて大丈夫ですよ。ノア様はいても足手ま――足手まといになるだけなので」
「もう言い直しすらしないんだ……」
ここまできたら、もはや逆に清々しい。
「帰りは自分でどうにかするので、ご心配なく。場所は分かりませんが魔力感知でノア様の位置は大体分かるので、問題ありません」
淡々とした口調でルナは続ける。

「それではノア様、『転移魔法』をお願いします」
「はいはい、分かったよ」
　私は雑な返事をして魔法陣の構築を始め、１０秒程で魔法陣が完成する。
「ノア様の魔法陣の構築速度はやはり異常ですね」
「そういう無駄口はいいから、さっさといくよ」
　ルナは無言で頷く。心の準備はできてるようだ。
「『転移魔法』」
　光に包まれ、ルナの姿は一瞬にして消えた。
　目立ったりしないといいけど、ルナのことだしその心配は要らないはず。
「それはそうと、私はこれからどうしよう?」

4話　理解が追いつかない

どこかも分からない山の中で一人残された私は、近くに生えている大木の根元にもたれかかってくつろいでいた。

こういう時は辺りを散策したりするべきなのだろうけど、魔力をあまり使いたくないこの状況で、面倒毎に巻き込まれたくはないので、ルナが帰ってくるまではここにいるつもりだ。いつ帰ってくるのかは知らないけど。

そんなことを考えながら、ルナの帰りを待っているうちに、私は深い眠りに落ちていた。きっと山のマイナスイオンのせいだろう。

そして、気がついた時には私は両手足を縛られ、目と口を塞がれた状態だった。何がどうしたらこうなるの？　全然理解が追いつかない。

けど、とりあえず、辺りの状況は把握した方がいいだろう。そう思った私は魔力で聴力を強化した。翼を魔力で強化して飛ぶのと同じように、魔力を使えば五感や身体能力といったものを強化することだって可能だ。

強化した聴力で周辺の様子を探ると、私は移動している乗り物の中にいるということ

が分かった。これは人が移動手段として使用しているものだ。『透視魔法』を使っている時によく見かけていたので、それくらいは知っている。

乗り物には、私以外に4つの呼吸音が聞こえ、そのうち3つが男、1つが女だった。男たちは心拍数は高いが呼吸は落ち着いていて、女は呼吸が荒く、じたばたしている。様子から見て、私と同様に両手足を縛られ、目と口を塞がれているのだろう。

状況から察するに、私と女はこの男たちに誘拐されている最中ということが分かった。身代金目的の誘拐というのが一番ありそうではあるが、それだと私が誘拐されている理由がよく分からない。私も一応貴族だけど、それは天界での話であって、この世界ではただの一般人――いや、一般人ですらない何かだ。

そんなことはいいとして、差し当ってはこの状況をどうにかしないといけない。逃げるだけなら簡単だ。けど、目立たずに逃げるとなれば話は変わってくる。さらに女も助けるとなると、難易度は跳ね上がる。

誘拐ということは、目的地は必然的に人目に付かない場所になるため、逃げるタイミングは移動している今より、目的地に到着してからの方がいい。人に見られて困るのはお互い様というわけだ。

しばらくして、乗り物がどこかに停まった。目的地に着いたのだろう。そのタイミン

グと同時に私は魔力で身体能力を強化する。そして、両手足を縛っているロープを引き千切る。これで私は自由だ。目と口を塞いでいるものも取っていざ開戦。

とりあえず、狭くて動きにくいので、私は女を抱えて乗り物から降りる。辺りを見回すと巨大な倉庫のような建物があり、その近辺には私を誘拐した男たちの他に、数十人の男が私たちを囲むように立っていた。全員顔を隠していて、手にはナイフを持っている。

「どうやってロープを解いたか知らねぇが大人しくしろよ、クソガキ！　まさかこの人数相手に逃げれると思ってんのか？」

一人の男が何かを言ってくるが何を言っているのか全然分からない。天界でよくあるパターンだと大人しくしないと殺すぞ！　とかが多いけど、この世界だとどうなんだろう？

そんなことを思いながら、私は男を無視して女の両手足を縛っているロープを解き、目と口を塞いでいるものも取る。

「無視するとはいい度胸だなァ？」

さっき私に何かを言ってきた男はそう言って私の腹を刺してきた。身代金目的だったら殺してはいけないから、心臓は避けたのだろう。

だけど、刺したはずのナイフは刺さっておらず、刃先がぐにゃりと曲がったナイフに

目を白黒させている。魔力で強化したナイフならまだしも、普通のナイフなんて身体強化した状態の私に刺さるわけが無い。私を誘拐したのが運の尽きだ。

私は男たちがパニクって女を刺したりする前に下級雷魔法を発動する。

下級雷魔法――雷の矢を生み出し、放つ魔法だ。威力は弱いが人に当たれば気絶するくらいの威力はある。下級魔法は固有魔法と違い、消費魔力が少なく、魔法陣を必要としない魔法だ。翼で飛ぶのと同様に魔力操作の技術さえあれば誰でも使うことができる。

私は雷の矢を男たちと同じ数だけ生み出して放つ。放たれた矢は1本1本が意志を持っているかのように飛んでいき、男たちの首を次々と貫いていく。

雷の矢に貫かれ、白目を向いて気絶していく男たちを見ながら、私は逃げるための『転移魔法』を構築していく。

「それって、魔法？　だよねっ？　さっきのも……」

隣で女が目を輝かせながら何か言っている。けど、ごめん。やっぱり全然分からない。

私は首を傾げて分からないアピールをすると、今度はさっきよりも早口で何か言ってくる。だから、分からないってさっきから言ってるじゃん！　いや、言ってないけど！

あーもう、なんかめんどくさくなってきちゃったな。魔法陣も完成したし、さっさと

転移で逃げるとしよう。場所をさっきの山に指定して――あれ？　できない？

どうしてだろう、決定権がなぜかこの女になっている。そして、既に場所が指定されている。

「もうどこでもいいや……『転移魔法』」

なんかあってもルナが何とかしてくれるだろうと考えた私は、どこかも分からない場所に知らない女と転移した。